Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

小説国際プラント・ビジネス戦争（十六）

杉田望

メキシコからの賓客

その日の成田空港の混雑はひどかった。午後六時四十五分、エアロメヒコは定刻より三十分程遅れて成田空港に到着した。ロス経由ということもあって、日本人乗客もかなりの人数だった。台車にお土産を満載した乗客たちが入国ロビーに次つぎはきだされてきた。

小川は山元竜夫それに山元と同じ職場の前原知子の三人で、一行の到着を持っていた。奇妙な組み合わせであると人は思うかもしれない。実をいうと小川が前原知子に会うのはその日が、初めてだった。知子は例のプロジェクトチームが発足したことに刺激されてか、最近、とみにメキシコに対する関心を強めていた。要するに仕事熱心な女性なのである。

「ぜひ一度、小川さんを紹介して」

それならばということで、小川と昼食をともにすることにした。三人の話題はメキシコの経済事情から社会問題、そしてメキシコの歴史へと広い分野におよんだ。機知に富む小川の話しぶりにすっかり彼女は持ち前の知的好奇心を満足させたようだった。食事も終わりかけたとき、小川は今日、メキシコからデリゲーションが来ることになっていることを話した。

「そうすると、ジェーナも一緒なのか」

「そうなんだ」

「それじゃ、俺も出迎えにいかねば……」

「私も御一緒してもかまわないかしら」

知子がそういった。何事につけても好奇心旺盛な女性である。とくに知子は小川の妻ジェーナに対して強い興味を持ったようである。山元はちょっと躊躇している様子だったが、小川は知子の申し入れを笑って認めることにした。こうして

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

三人の奇妙な組み合わせができた。

「入国手続き、だいぶ時間がかかりそうだ」

「そうですね」

小川のそばに立つ前原知子がいくぶん非難めいた口調でいった。かれこれ二時間近くも待たされたであろうか。例によって、成田空港は入国手続き、通関といやに時間がかかった。外国人には評判のよくない厄介なイミグレーションである。一行が入国ロビーに姿を見せたときは、すでに午後九時半をまわっていた。右手にアタッシュケースを下げた、レピカが自動ドアの前で大きく手を上げた。

一行は総勢十名のデリゲーションだった。ジェーナの姿もあった。小川の姿を認めると、人波をかき分けるようにして走り出した。おもいっきり小川の胸に飛び込んできた。小川は強く抱き締めた。レピカがおどけた調子で二人に近づき、小川に握手を求めた。

混雑は一層酷いものになった。やや遅れてエリアミーノが姿をみせた。肥満ぎみの巌を揺すりながら例の愛敬のある笑顔を見せた。額には玉のような汗が吹き出ていた。残る二人はトランクを乗せた台車を押しながらロビー入口に現れた。いずれも小川には既知の顔ぶれで、一人は金融エコノミストのアキラル、もう一人は技術者のペルドスだった。その他、幾人かの随員が同行していた。

小川は一行に山元と知子を紹介した。エリアミーノは物欲しげな態度で、知子の手を堅く握り締めた。互いの挨拶が一段落したとき、一行に向かってつかつかと歩み寄ってきた一人の男があった。男は日管製鉄専務の唐沢と名乗った。唐沢専務は巨体を揺さぶるようにして、レピカと挨拶を交わした。笑うと細い目が一段と細くなってしまう。鈍重そうな風貌からは想像ができない早口の英語が飛び出したのには驚かされた。

今田が到着ロビーに着いたときには、すでに一行を歓迎する二十名ほどの人垣ができていた。関西商事から出迎えにきていたのは今田のほかに、エネルギー機器部の中嶋部長、それに大園副社長も姿をみせた。驚いたのは前原知子の姿があったことだった。正直いって今田は一瞬ギクリとした。なぜこんなところにいるのか、さっぱり理解できない。

今田は知子に目線で挨拶を送った。こんな場所で不謹慎かもしれないが、その後の元子の様子も知りたかった。が、知子はわずかに微笑んだだけで、これとい

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

った反応を示さなかった。なにかがっかりした気分になった。もっとも親しく話しかけられたとしても、今田にはどう対応してよいかわからないことも確かだった。ふとみると、今田のそばに小川の姿があった。さらにレピカ、エリアミーノの見覚えのある顔もあった。

「どうもその節は失礼しました」

そういったのは今田の方だった。つい数日前のことである。小川とはパイプラインの見積りのことで、一、二度電話連絡をしたことがあるが、顔を合わせるのは初めてのことだった。小川は慇懃(いんぎん)に挨拶を返した。慇懃(いんぎん)な物腰ではあるが、親しみのある態度だった。

「それではまた後ほど」

と、いい残すと、小川は別な輪のなかに入っていった。驚いたことに、ニック社の和村専務と並んで、佐藤忠商事の切れ者として知られる笠原則社長の姿があるではないか。なぜここに。笠原副社長は油断のない物腰で、レピカ一行と親しげに談笑を交わしていた。

今田は知子がこんな場所に姿をみせたことといい、佐藤忠商事が出迎えにきていることといい、奇妙な胸騒ぎを覚えた。今田はなつかしげに、レピカに声をかけたのだが、レピカの挨拶は儀礼の域を超えるものではなかった。それにしてもレピカの態度はよそよそしかった。やはり見積りの提出が遅れたことが原因しているのであろうか。

関西商事がメキシコ・プロジェクトに対する最終的な態度を決めたのは、サウジのワール油田がイスラム過激派によって攻撃を加えられた翌日のことだった。だからまだ見積り作業は準備過程にあり、最終的には作業は終わっていない。それを一週間以内に終えよ、というのが山田社長の命令だった。

メキシコでカルロスに会い、プロジェクトの推進を約束してから六ヵ月は経過している。何回か、見積り提出を求める催促のテレックスが入ったのだが、それを今日まで無視してきた。今田にも釈然としないものが残っていた。もっとも肝心な日管製鉄の方も、どんな事情があったかはわからないが、具体的に動いている形跡はなかった。

一旦は常務会で参加決定を延期しておきながエネルギー危機が再発するや今度は掌(てのひら)を返したような参加決定を下した。ひどく立ち遅れた対応だった。レピ

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

カがよそよそしい態度をとるのも当然かもしれない。それにしても唐沢専務の態度は少しも動ずる気配はなく、鷹揚に構えレビカとの間で冗談のやりとりをしていた。こういう場面ではさすがの大園も小さく見える。社格というものであろうか、今田はそんなことを考えていた。

それぞれが、それぞれの思惑を秘めて集っている。その集いの中心は小川とレビカだった。女同士ということもあろうか、ジェーナと知子はいつの間にか旧知の友のように、会話を弾ませていた。

佐藤忠商事の笠原副社長と大園副社長との間で、早くも軽いジャブの応酬が交わされていた。今度のデリゲーションを巡っては、どこがアテンド役を引き受けることになるか、それが最初の攻防戦のようだった。それをじいっと日管製鉄の唐沢専務が見守っている。たぶんハタ目には、親しい友を迎える和気あいあいの雰囲気に映っていることであろう。

華（はな）やいだ入国ロビーで激しい葛藤が演じられているとは、通りすがりのものはだれも気がつかないだろう。レピカは出迎えに来てくれた人びとに簡単な挨拶をしただけで、小川が用意した単にそそくさと乗り込んだ。残されたものたちは気抜けしたようにそれぞれ散っていった。

二台用意された車の先頭にはレピカとジェーナ、小川の三人が乗った。レピカは二人に対する思いやりのつもりか、自らすすんで助手席に座り、後部座席を二人に譲った。時間が時間だけに東京に向かう高速道路はすいていた。もう十二月に入っているというのにヘッドライトに照らしだされる風景にはまだ色濃く緑が残されていた。

レピカは、車窓に流れる風景に見とれていた。よく晴れた初冬の夜だった。星がまばゆく輝いている。車の流れは快調だった。後続のエリアミーノの車が一定の車間をおいてついてくる。ジェーナがじいっと小川を見つめている。小川は自分の妻を美しいと思った。

「で、スケジュールのことだが……」

「はい、明日は日経連の鎌谷会長との会見を予定しています」

レピカは助手席から後ろを振り返りながら頷いた。三人を乗せた車は、津田沼インターを抜け、市川にさしかかったところだった。このあたりからは緑の風景は消え失せ、けばけばしい広告塔のネオンがとって代わった。サウジ事件のショ

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

ックも一過的で電力節約の呼びかけも浸透せず、街のネオンはじきに復活してきた。

高速道路を照らし出す街灯は、蛇行しながら延々と連なり、それはある種の人工美をつくり出していた。重なり合うようにしてそびえ立つ高層アパートの光が、対面にきらきらと揺れている。昼間の喧噪と汚れの一切を薄明りのベールに包み込んでいる。

時刻は午後十一時を少しまわったところだった。旅の疲れが出たのか、レピカは軽い寝息を立てていた。ジェーナの柔らかく細い手が小川の手に重なった。二人はそっと唇を合わせた。甘酸っぱい香りが口いっぱいに漂った。ジェーナの黒い瞳が潤んでいた。

翌日の午前十時。鎌谷会長との会見が行なわれた。鎌谷の会長室は白をベースにしたかなり広い部屋だった。白い大きな椅子に座る鎌谷は、いくらか小さく見えた。鎌谷の後ろには日経連事務局長と名乗った初老の男が、メモの用意をして座った。日墨経済委員長の石井千代田銀行頭取も同席した。

メキシコ側は小川を含めて六人だった。レピカはいくらか緊張している様子だった。エリアミーノは組んだ足を屈託なく揺らせている。小川が例によって通訳にあたることになった。最初に切り出したのは鎌谷の方だった。

「小川君を通じてお申し越しのあった件、昨日の役員会議でお引き受けすることを正式に決定いたしました。レピカ社長に直接この決定をお伝えできることを誠に嬉しく思う次第です」

鎌谷の肌は艶々として柔らかそうだ。いくらか紅潮しているようにみえる。慎重に言葉を選びながらも話し方は快活だった。問題は借款の条件だろう。できるだけ低利で、しかも長期のクレジットが良いに決まっている。しかし、五十億ドルに上る巨額な借款である。条件が厳しくなったとしても仕方がないかもしれない。小川は鎌谷の話を通訳しながらそんなことを考えていた。

「ご承知のように日本の財政事情はまことに厳しい。ですから政府部分の比重は低くなるかもしれません」

鎌谷は手にしたメモを見ながらいった。鎌谷が提示した条件は、海外経済協力基金などいわゆる政府ペースの借款十五億ドル、日本輸出入銀行と民間銀行との

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

協調融資で併せて三十五億ドルを用意したいというものだった。

政府ペースの借款は今後の外交交渉を通じて金利や期間などを決定、一方、民間協調融資については日本輸出入銀行など関係金融機関と個別の交渉を通じて、決めたらどうだろう、と鎌谷は提案した。正面に座るレピカは椅子から腰を進めて鎌谷の話に聞き入っていた。

「さらに条件があります」

鎌谷は続けていった。

「まず第一の条件を申しますと、日産五十万バレルの原油の対日輸出を願いたいこと、第二は天然ガスの開発に関してですが、日本に開発の優先権を与えることと開発された天然ガスを日本に対して優先的に供給すること、以上が借款を提供するわが方の条件であります」

レピカの表情がみるみる間に硬くなっていった。明らかに不快な表情を浮かべていた。それも当然だった。お願いする立場は日本側のはずなのに、それを鎌谷は逆転したいい方をしている。

鎌谷の通訳をしながら小川は、果して日本側は本気になってこの交渉を進めるつもりなのか、疑問に思った。

第一、借款を申し入れた当時とまるで情勢が変わっているではないか。あのときは確かにメキシコには不利な情勢だった。だが、今は違う。サウジ事件の結果、世界のエネルギー情勢は激変した。明らかに日本に不利な情勢である。

それにもかかわらず鎌谷の姿勢は強硬だった。小川は厚い壁を感じた。この頑固な老人は事態の深刻さをまるで理解できていないのか、それとも緻密な計算の上に立ってそういっているのか。それにしては鎌谷の表情はまるで屈託がない。無邪気でもあり、不気味でもあった。

レピカは改まった調子でいった。

「まず、最初に申し上げておきたいことがある。第一は最初この話をお願いした時点に比べまして、世界のエネルギー情勢が大きな変化を見せているということ。第二は今回の交渉ではそうした状況の変化を双方の共通認識として交渉を進めたいと思う。第三はこれまでの経緯はそれなりに考慮はします。ですが、決着が今日まで遅れたのは日本側の責任であるので、その意味で日本との交渉には必ずしも優先権を与えるつもりはない、つまり他の諸国とワン・ノブ・ゼムである、

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

というふうに考えて頂きたい」

だから鎌谷会長が提示した条件はとてもではないが、受け入れ難い内容であるとレピカは結論した。鎌谷はレピカのいい分をいちいち頷きながら聞き入っていた。場面はちょっと白けた雰囲気になった。

「おっしゃるように状況はこの六ヵ月間に大きく変わった。けれどもこの間、日本とメキシコとの間に交渉の条件を変えなければならないような変化が起こっているとは考え難い。我われとしては最初に提示されたメキシコ側の条件はまだ交渉の前提として生きているものと信じている」

どうやら話し合いはその前提条件を巡って平行線を辿りそうな気配だった。鎌谷会長としても一旦提示した条件をそう簡単に引っ込めるわけにはいかないだろう。小川にはそう思えた。

「我われとしては、五十億ドルの借款にメキシコがオブリゲーションを負うような付帯的な条件を加えることには同意できません。そもそも借款の話とエネルギーの対日供給の問題は別次元のことであるというふうに我われは理解している」

レピカは突放すようないい方をした。

「そうするとなんですな……とりあえず借款の話を先行させたい、あなたたちの考え方はそういうことですな」

「その通りです」

レピカは撫然としていった。鎌谷は少し考え込むような表情をつくった。

「うむ、これは難しい問題だ。ところでメキシコ側は、交渉の前提としてどういったことを考えているのか、参考のためにお聞かせ願えないだろうか」

だが、鎌谷の顔は少しも困った顔ではない。相変わらず笑みをたたえている。レピカは当惑したような表情を浮かべた。デリゲーションの昨夜の打ち合わせに際しては、まず、日本側はメキシコ側の条件を聞いてくるのではないか、と予想して準備をしてきた。

ところが鎌谷は、聞かれもしないのに一方的に日本側が考える条件を提示してきた。それは予想外のことであった。しかもそれはメキシコ側にとって、とても受け入れられそうにない内容だった。これでは相手を怒らせてしまうことになる。交渉のテクニックとしては下策というべきであろう。

が、鎌谷が改めてメキシコ側が希望する条件を問いてきたということは、日本

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

側に譲歩の余地があることを、黙示的に示唆した発言と受け止められなくもない。そうだとすれば、日本側はこの問題に対して、柔軟に対応する意志を持っているものと考えてよいのではないか。交渉は前進する可能性があるのではないか、小川にはそう思われた。レピカの対応は冷静だった。レピカは続けていった。

「問題は二つあります。第一は借款自体の条件設定に関してです。鎌谷会長が提示された内容では、我われが受け入れる金融コストはいかにも高い。金融コストの低い政府ペース借款の比重をもう少し引き上げることができないか、第二は借款供与に伴う付帯条件に関してです。エネルギー事情に問し日本の状況と希望は理解できますが、我われはまず、借款問題を解決する、そのことを優先させて交渉することを提案したいと思います」

「なるほど、いわんとすることは理解できた。ただ、ここで申し上げておきたいことは、これは日経連の立場に関してですが、本件を円滑に進めるべく、その環境づくりを手伝うというのが私どもの立場でありまして、借款の供与に関して直接の当事者ではないということを、まずご理解を頂きたい」

鎌谷はすました顔でそういった。いわれてみれば、その通りだった。日経連は経済界の調整機関にすぎない。形式論的には鎌谷のいわれてみれば、その通りだった。しかし、形式論としては鎌谷のいう通りだとしても、実態としての日経連は政府与党、政府機関に対して絶大の影響力を持っていることは周知の事実だった。

にもかかわらず鎌谷は借款問題と原油供給問題を切り離して交渉を進めようというレピカの主張に対して、組織論を絡めて答えたということだ。ということは、メキシコ側の要求には、そう簡単には応じないという意思表示でもあるわけだ。

一旦は引く素振りをみせ、今度は強気に出る。いったい、どっちが本音ということなのか。いずれにしても原油の供給問題をちらつかせれば、日本側は簡単に譲歩するのではないか、と甘くみたのが間違いのようだった。レピカは意外な話の展開に、渋い表情をさらに歪めた。

「この話に我われが魅力を感じるのは、借款の問題と原油供給問題がリンケージしているからです。借款の話は借款の話だ、原油供給問題は別問題である、そういうことであるならば、日本側としてはリスクが一方的であり、妙味がなくなる

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

んではなかろうか」

そういったのは石井千代田銀行頭取だった。借款はいわば原油供給に対する見返りである。だから借款と原油供給がリンケージしていなければ、日本側としては借款要請に応じられない、現在のエネルギー事情からすれば当然の主張である、と小川は思った。しかし、それにしては借款の内容はまるでコマーシャルベースに近い高いコストを設定してある。それはどういうことか。

たぶん金融コストをどこまで引き下げることができるかということと、もうひとつはメキシコ側がどの程度の量の原油供給を日本側に約束できるか、それが交渉の最大の課題になりそうだった。レピカが受けて答えた。

「つまり付帯的条件がセットされていなければ、この話を進めることはできないということですか……。我われとしては日本側が希望する付帯的事項を検討することはやぶさかではありません。しかし、鎌谷会長が提示された金融内容ではいかにもコストが高い。経済協力基金ベースの資金の比率をもう少し高めることができないものか。つまり全体として、金融コストを引き下げたい、それが我われの希望です」

鎌谷は腕組みをして考え込んだ。そして言葉をつないだ。

「だいたい、双方の主張が出揃ったように思う。どうでしょうか、今日は第一回の協議でもありますし、双方が相手方の主張が譲歩できる範囲の内容であるかどうかを持ち帰って検討してみたらどうか」

レピカが大きく頷いた。

「結構でしょう。次の会談に際してもう少し話を詰めたいと思います」

そういって立ち上がった。第一回目の会談は不調に終わった。が、ともかく日本側は対メキシコ借款に前向きで取り組む姿勢を見せた。このことは評価してもいいんではないか、小川にはそう思えたが、レピカの表情は無然としたものだった。

それから三日後の午後。第二回目の交渉が行なわれた。場所は日経連会館の国際会議室だった。メキシコ側は前回と同じく、小川を含めて六人。この日は何か他に用事があるとかで、鎌谷の姿はなかった。石井千代田銀行頭取が日本側代表の席におさまった。このほか日経連事務局から飯田経済協力部長が出席した。総勢十人ほどであった。

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

「日墨経済委員会および外務省、通産省など政府関係機関と協議した結果、本件に関する私どもの考え方を皆さんにお伝えしたいと思います。検討に当たりましてはメキシコ側の希望をできるだけ尊重したつもりです。ごれが日墨双方にとりまして最善の問題解決の方向ではないか、そのように確信する次第です」

冒頭、石井頭取はそう切り出した。細身の軀(からだ)が一層細く見えた。会議の雰囲気は前回の交渉が不調に終わっただけにいくらか緊張していた。用意されたメモを日経連の事務職員が会議出席者全員に配り終えたところで、石井は再び話をつないだ。

「それではメモに基づきまして、説明させて頂きます」

石井が改めて提案した内容は、海外経済協力基金ベース十五億ドル、日本輸出入銀行と市中シンジケーションで三十億ドル、それに新規に石油開発公社が開発金融五億ドルを負担するというものだった。金利は加重平均で七・三パーセント程度になるはずだと、石井はつけ加えた。

「石油開発公社の開発金融というのはどういった性格の資金ですか」

そう質問したのはアキラル金融担当だった。石井に促されて飯田経済協力部長が説明に当たることになった。飯田はいかにも実務官僚風で、ほとんど私的な感情をまじえず、どんなことでも平然とやれる、そうしたタイプの男に見えた。

「簡単にいえば、対日供給を約束した海外石油開発プロジェクトに対して、長期でしかも低利のローンを提供するものでして、返済は原油の輸入で相殺するのが原則です。使途はもちろん石油および天然ガス等の開発に限定され、具体的にはたとえばボウリング費用、生産設備の建設費、現地の備蓄設備、積み出し施設、パイプライン建設費などが対象となっているわけです」

レピカが眉を曇らせた。再び雲行きがおかしくなりそうな気配だった。飯田の説明だと、石油開発金融は平均金利四パーセントというからには、そう悪い条件ではなさそうだと、小川には思えた。しかし、レピカが問題としているのは、たぶん原油とタイド（ひも付き）で、融資することにあるらしい。

原油の対日供給問題と借款の問題を出来るかぎり切り離して交渉を進める。現在のエネルギー情勢から判断して、たぶん日本側はリンケージ論に最後まで固執するはずだ。できるだけねばり、最後の譲歩の線としてリンケージ論に同意する、その過程でできるかぎり有利な条件でもって、コストの安いクレジットを獲得す

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

る、それが昨夜の会議で決めたメキシコ側の交渉に臨む基本方針だった。

「前回の会議でも申し上げたことですが、メキシコ側の基本的な立場をここで再び繰り返していいますと、まず、借款問題に決着をつけ、そのうえで原油供給問題を改めて協議する、ということです。しかし、ここで新たに日本側からご提案を頂いた石油開発金融なるものは、予め原油供給をタイド化した金融だ、というふうに考えられる。そうだとすれば、これは受け入れることのできない金融スキームということになるわけです」

話は前回と同じ流れになりそうだった。石井はちょっと困った顔をしたが、すぐに気を取り直したようにいった。

「ただ今、私どもが提案いたした内容に関してメキシコ側が問題とされるのは、それ以外にもございましょうか。なんでしたらここで問題点を全部出しまして、どれが譲歩可能で、どれが絶対的に譲れない線なのか、それを明確にすることから交渉を進めることにしたらどうでしょうか」

それは交渉を実務者レベルに戻して、進めようではないかという提案にも聞こえた。そうだとすれば、デリゲーションが日本に滞在している間に交渉を決着させることは難しくなる。長期化することは間違いなさそうだ。しかし、昨夜のミーティングでは、私が滞在している間に、交渉を決着させたい、レピカはそういっていた。果してレピカはこの提案にどう答えるのか。

「つまり石井さんがおっしゃることは、作業部会を別途に設けて、問題点の洗い出しを行ったらどうか、そういう意味にとらえてよろしいですな。ただ、我われとしては結論を急いでいる。日本との交渉が仮に駄目な場合、他の第三国との間で交渉を進める必要が出てくるので、率直にいえば日本との交渉にそれほど時間をかけられないということです」

交渉の駆け引きとはいえ、少しいいすぎのような気もした。例の事件のおかげで世界のエネルギー情勢が資源国に有利になっているとはいっても、考えてみればメキシコの場合はあまりにも問題が多い。累積債務が約一千二百億ドル、しかも国際金融秩序をまったく無視し一方的なデフォルトを宣言するなど、とてもではないがまともに相手にするところが出てくるはずもない。資源事情に弱い日本だからこそ交渉に乗った、というのが正直なところである。

そのことは鎌谷を始め石井自身も充分に承知しているはずだ。レピカが恫喝に

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

も似た強硬な発言を繰り返していたとき、石井の口元にほんのわずかだが、皮肉な笑いがうかんだ。明らかにレピカの発言を、揶揄(やゆ)した笑い方に見えた。

「なるほど、事情は理解できます。しかし、問題点の整理を行った上でないと交渉が前進しないのではないか、私にはそのように思われる。できれば、個別に作業部会を設置して、たとえば金融問題と原油の供給に関する問題をそれぞれの作業部会が並行して協議することを改めて提案したい」

メキシコ側が借款問題と原油供給問題を二段階に分け、まず、借款交渉が纏まったことを前提に原油の供給問題をその後で協議しようではないかと、提案したのに対して日本側は逆に同時並行で交渉を進めようと提案してきたことになる。それにレピカは時間がないともいった。石井が提案した交渉のやり方だと、確かに時間の節約にはなる。だが、やはりレピカは石井の提案にこだわりをみせた。

「交渉はやはり借款問題を優先させたい。そうでないと、我われが持っている天然ガスの開発に目途をつけることができないし、仮に日本に原油を供給するにしても実際のところ開発に目途をつけない限り、話をすることができないわけです。それからこれは明確に申し上げておきますが、最初から原油供給を前提にして話を進めることはできません」

「今回の話し合いで原油の供給問題が解決されないというのであれば、日本側にしても交渉を進めることに意義を認めることができない。これも日本側の譲れない線であることを明確に申し上げておきたい」

石井もねばりを見せていた。無遠慮に吐き出すタバコの煙で、部屋の空気は汚れきっていた。ふと、時計を覗いてみると、会議の予定時間、午後五時に近づきつつあった。結局、今日も交渉の本題に入れず、入口の議論に終わりそうだった。収穫の少ない会議に、小川はぐったりと疲れた気分になった。

借款の話が先だという立場に固執するメキシコと、原油の供給が約束されないような借款の提供には応ずることができないとする日本側の主張が正面からぶつかってしまった。解決の糸口を見出せないまま、交渉はデッドロックに乗り上げた形となった。

結局、第二回目の交渉は次の会議日程を決めただけで終わった。冷却期間を置くという意味もあって、交渉再開は週明けの四日後にすることになった。翌日からレピカ一行は忙しい日程をこなさなければならない。明日はニック社とメタノ

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

ール・プラント計画の打ち合せが控えていた。交渉は霞が関近くのニック本社で行われることになっていた。

その日の夜遅く、小川に鎌谷から電話が入った。ジェーナと一緒に日曜の午後自宅で食事に招待したい、というのが話の内容だった。鎌谷は難航を続けている交渉のことにはいっさい触れずに、

「小川君、あんなに美しい奥さんを放り出しておくと、誰かにさらわれてしまうぞ」

と、軽い冗談をいって電話を切った。そういえばせっかく、ジェーナが東京にやってきたというのに、ほとんどまともな口をきいていない。すっかり仲良しになった前原知子と買物に出かけたりはしているようである。が、ジェーナは会談要録をこつこつと纏める作業など、裏方の仕事をこれといった不満もいわずにこなしていた。どこか、古き時代の日本の女たちに似た自己犠牲的なところがある。

それにしても交渉は最初に予想していたよりは、難航を極めていた。こういう場合の通訳というものは確かに疲れる。それに小川の場合は単純な通訳ではない。交渉の当事者であると同時に双方の間に立ち交渉を軌道に乗せるべく、調停者としての役割も果たさなければならない。だから今度の場合は芯からの疲れを覚えた。

小川が二人の部屋に戻ったときはすでに午前一時をまわった時刻であった。にもかかわらず、ジェーナはホテルの備えつけのデスクに向かって、一人会議資料の整理にあたっているところだった。ジェーナは小川の気配を感じたらしく、作業の手を休めて振り向いた。

「アキオ、ちょっと困ったことがあるの。聞いてくれる」

眉をしかめながらジェーナはいった。本当に困っているという表情である。

「もちろんいいとも……で、どういうことなんだ」

「エリアミーノったらトモコをしつこく追いかけまわすもんだから、トモコとっても迷惑しているの……エリアミーノをなんとかできないかしら」

いつになく真剣だった。そういえば、成田空港でのエリアミーノの知子に対する態度がいかにも執拗だったことを思い出した。エリアミーノは人物としては悪くはないのだが、好色なところが難点だった。こんなときに面倒を起こしてくれねばと小川は憂慰な気分になった。

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

「困ったことだなあ……」
「昨日のことなんだけど、あんまりしつこかったのでトモコ、ついに怒りを爆発させて……」
「それで……」小川が聞き返した。
「エリアミーノの頬をおもいっ切り、叩いてしまったらしいの」
「ちょうどよかった、たぶんエリアミーノにとっては教訓になったはずだ」
小川がそういうと、ジェーナは含み笑いをした。ジェーナの深刻な顔は演技だったようだ。つられて小川も笑った。エリアミーノのしょげかえった顔が思い浮かぶようである。二人は声を上げて笑った。
ニック社との打ち合わせは、午前九時から開始された。ニック側からは並本則社長のほか和村専務、メタノール事業化研究開発チームの多田次長、それに営業部門から幾人かの中南米担当者が出席した。それにどうしたわけか、佐藤忠商事の笠原副社長がオブザーバーとして会議に出席した。

ニック社の並木副社長は、専務の和村とは対照的で、太い猪首（いのしくび）の肥満型の男だった。愛想笑いがいかにもわざとらしく、無理がある。こんな風貌の男がよくまた海外営業なんぞ務まるものだと、小川には思えた。が、海外営業の経験が豊かだけに英語は得意のようだった。和村専務は相変わらず神経質そうで、並木副社長に対しては端から見ていても気の毒なほどの気の使い方をしていた。

メキシコ側はレピカを中心に同様の顔ぶれで交渉に臨んだ。日経連を相手にした交渉とは違って、気分は楽である。まず、簡単な挨拶を終えた後、多田次長がメタノール建設に開するフィージビリティスタディの概要説明にあたった。多田次長の説明は例によって歯切れが良く、彼のプレゼンテーションはほぼ一時間程度で終わった。
積算の結果、建設コストはざっとみて十五億ドル近くに連することがわかった。経済性からいえば、火力発電所と併せて建設した方がコストも安いし、合理的であると多田次長は結論した。細目に関してメキシコ側から質問に当たったのは技術者であるペルドスだった。
「建設費用は我われのコンサルタントが示した積算結果よりも、金額にして約二

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

十パーセントはど高くなっている。これはどうした理由なのか。第二の疑問点は触媒とプロセスの採用に関してですが、西ドイツのプロセスを採用することにした理由を説明願いたい」

ペルドスはいかにも技術者らしい生真面目な調子でいった。

「ご承知のようにメタノールは腐食性の強い化学物質であること、また、水溶性の物質であるので、事故で海洋に流れ出したときの対策も必要です。環境問題を充分に配慮しなければなりません。ですから圧力容器にしても、また貯蔵タンクにしても素材の選定に当ってはより慎重を期しました。そのために石油化学や石油精製等に比べて設備費が割尚となったことは事実です」

多田はそこで一旦言葉をきって、次になぜ西ドイツのプロセスを採用することにしたのか、具体的なデータを上げ、説明した。多田は技術的な問題もさることながら、メキシコとアメリカとの関係を考えれば米国の技術、とくにメジャーが開発した技術をこのプロジェクトで採用することは困難ではないか、と付帯的な意見を述べた。

ペルドスは多田の説明に満足したようだった。ただ、ここで問題になったのも計画の経済性を考えた場合、このプロジェクトを成功させるためにはどうしても低利の金融が必要であるということだった。この報告書における経済性の検討では、公的金融の確保が前提である、と述べてある。小川はその通りだと思った。

金融問題が話題にのぼったとき、それまで沈黙を守っていた佐藤忠商事の笠原副社長が並木に対して発言を求めた。精悍な軀にスーツをびしっと決めている。まだ五十代の半ばであろう。歳の割には老けた印象だった。笠原はスペイン語で話しはじめた。

「ご参考になれば、と思います」と冒頭にいって笠原は、資金調達にあたって公的な制度金融に依存するよりはむしろ国際金融市場で必要資金を調達した方が、全体の金融コストが安くなるし、フレキシブルな資金運用が可能であるという意味のことをいった。プロジェクトの遂行に当たってそうした金融的な支援を与える役割を担うのが、実をいうと総合商社の役割でもあるとつけ加え、笠原は言葉を切った。

単なる参考意見にしては、なにか笠原の発言は思惑ありげだ。それにこの場になぜ、笠原が出席しているのか、そのことも疑問なしとはいえない。が、レピカ

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

にとってそんなことはどうでもよいことのようである。レピカは笠原の話を興味深く聞いている様子だった。

それは日本側との借款交渉がうまくいっていないということもある。だが、なによりも調達した資金を弾力的に運用できるといったことにレピカは最大の関心を持ったようだった。

「具体的に説明願えないだろうか」

やはり困ったことになりそうだった。レピカは笠原の話に飛びついたのだ。小川は誘惑めいた笠原の話に危険なものを感じた。笠原は満足そうに頷きながらいった。

「国際市場から金融を受け入れる場合、公的制度金融に比べて金利などの面では確かに不利です。しかし、公的制度金融が硬直的であるのに対して、金融市場から調達した資金は借り手が自由に運用することが可能です。つまり借入れの段階と予算実行段階では、一定の時差が生ずるわけでして、その時差を利用して資金運用を図るということです」

そうすることによって、全体としての金利コストは制度金融に比較して、大幅に軽減できるはずだ、と笠原はいった。多くの発展途上国の場合、こうして浮かされた資金を、政治家の個人的な利殖のために利用されていることは、世間ではよく知られることである。メキシコとても例外ではない。それだけにリスクも大きい。笠原はそのことに触れることは慎重に避けた。金融担当のアキラルは、リスクヘッジとの関連でいくつか笠原に質問を浴びせかけた。

「いや……これはあくまで参考としてお聞き頂きたいということでして」

と、笠原は言葉を濁した。だが、笠原のいったことにレピカが強い関心を示したことは確かのようだった。ニックの多田は露骨に不愉快な表情を浮かべた。多田は笠原の隠された意図を見抜いているようだった。

「まだ、肝心な技術上の問題の検討が終わっていない。金融問題はその後でも遅くはないと思う」

金融問題も重要だが、それよりも肝心な技術的な問題を充分に検対しておかなければならないという、多田の意見には小川も賛成だった。笠原はちらっと、並本則社長のほうへ視線を走らせながらいった。

「いや、これは失礼しました」

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

少しも恐縮した顔ではない、笠原のいい方は言葉だけである。

技術問題の検討は比較的順調に進んだ。最後は合弁方式で計画を進める場合の問題点とスケジュールの検討に入った。これでプランニング・フェーズは終わったことになる。次の段階はビッド・アシスタンス・フェーズに入る。コントラクターの立場からいえば、ここに足を踏み入れるかどうかは、微妙だった。しかし、メキシコ側はいずれにしてもニック社にプラント・エンジニアリングまで、任せるというのであれば問題はない。交渉ではそのことが問題として浮上した。

それは小川が最初に打ち合わせを行なったときも問題になったことだった。

「コントラクターの選定はこれから協議して決定したい。ですが、ビッド・アシスタンス・フェーズに参加したからといって、応札(おうさつ)者としての資格を奪うものではないと、我われは考えています」

並木副社長は、レピカのその言葉に安心したようである。それを契機に話し合いはビッド・アシスタンス・フェーズの問題点の検討に入った。ここではマーケットサーベイ、生産される製品の輸送、建設資材の輸送、現地の立地条件、資本の調達と投資計画、経済性の詳細な検討などが検討項目である。実務的なやりとりが多田とペルドスとの間で交わされていた。

資金調達と投資計画に関しては、メキシコ側が改めて提示することになり、今回の交渉には乗せないことにした。一方、トランスポーティションやプラント・サイトの立地条件のサーベイはどうしても現地調査が必要である。現地調査は来春早々に実施することで合意した。

「メタノール計画は少なくとも再来年の後半には完成させたいと思う。逆算しますと、スケジュールとしては現地調査を終えた後、ただちにエンジニアリング・ステージに入らなければなりません」

非常に強行なスケジュールである。しかし、ペルドスの表情は案外平然としたものだった。米国のマサチューセッツエ科大学で修士課程を終了したというペルドスは、技術者としては一級だった。歳はまだ若い。三十を少し越えたばかりだったが、今回のプロジェクトでは、テクニカル・マネージメントを一手に引き受ける大任を担っていた。

「けっこうでしょう」

そういったのは並木副社長だった。バージ式のプラントとはいえ、プランニン

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

グだけでも三ヶ月を要した。プロセ・スデザインや詳細設計、さらに資機材の調達計画まで含めると、どんなに楽観的にみてもたぶん半年は最低必要である。ペルドスがいったスケジュールを逆算すると、それを三ヶ月程度で終えなければならない計算となる。多田は憂鬱だった。

（つづく）

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

小説国際プラント・ビジネス戦争（十七）

杉田望

会長の茅屋

世田谷の成城といえば、閑静な高級住宅地として知られる。日経連会長の鎌谷康祐の私邸はその一角にある。人通りは少ない。銀杏の落葉が無機質のアスファルトの道路に彩りを添えている。すでに冬の景色だった。高い塀を遣らせた豪邸が続き、緩やかな坂道を登り切ったところに質素なつくりの屋敷がある。

表札には肉太の見事な楷書体で『鎌谷康祐』と書いてあった。成城という街の雰囲気、それに鎌谷康祐の社会的位置から考えて、この屋敷はどうみても茅屋と呼ぶべきであろう。が、それを世間の人びとは趣味的で贅沢だという。なるほどそうかもしれない。こんな高級住宅地に三百坪もの邸宅を構えているのだから頷ける話ではある。

その日は日曜日だった。ジェーナはいつになく幾分はしゃぎ気味だった。二人で出かけることがよほど嬉しかったとみえる。それにしても、二人がこうして出かけるのは彼女が日本に来て二週間も経っているというのにこれが最初のことだった。小川はすまなかったと思っている。

街中でのジェーナは目立った。すらりと伸びた脚、まっすぐで長い髪、印象的な大きな瞳。その美貌と気品に男たちばかりか、女さえも息を呑んで振り返った。午前中はホテル近くの赤坂、青山周辺をそぞろ歩き、渋谷で昼食を終えてから新宿に出て、成城までは小田急線を利用した。

町は師走の喧噪に包まれていた。サウジ事件が発生して三週間近くになる。この事件の衝撃は大きかった。なによりも核兵器が人間を対象に使用されたことの衝撃である。

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

世界中を震え上がらせた。が、この国の人びとは、実際的効果はほとんど期待できないことは自明なことなのに、米ソ首脳が改めて危機管理の必要を確認したことで、このような暴挙が再び繰り返されるはずはないと、何の疑いも抱かず頭から信じているようだ。人類史上初めて核兵器の洗礼を受けた国にしては、滑稽なほどの純真さである。

そのことよりもこの国の人びとが真っ先に心配したことは、原油の供給が果して大丈夫かどうか、まず目先の問題だった。それとても一年程度は大丈夫だと、政府が発表するやその懸念もまたたくまに鎮静してしまった。今のところは確かに灯油、ガソリンにしても極端に不足しているわけではなさそうだ。それが政府の意図的な情報操作の成果であることに、だれも疑問をさし挟んだ形跡はない。

クリスマスツリーを飾りたてるイルミネーションがまだ日が高いというのに、何とけばけばしく、まばゆいことか。節約を呼びかける声はか細かった。街は年末商戦のさなかにあった。それが虚構の繁栄を煽りたてているようでもある。街を歩く人びとは浮き足だっていた。

何事もなかった、これからも何事も起こらないだろう。だれかがうまく問題を解決するさ、そのように信じているのだろうか。小川は街の風景を見ながら、異邦人としての自分を改めて発見したように思った。

マスコミも評論家たちも、そして野党の議員たちも一応は深刻な表情をつくり、政府の対応の立ち遅れを詰(なじ)ってはいた。だが、本気で心配しているようには思えなかった。第一次石油ショックのときも第二次石油ショックのときもそうだったが、空騒ぎをした結果、大企業を儲けさせただけではなかったか。たぶん今度の場合もうまく乗り切るに違いないと考えているのだろう。小川はこの楽観的な民族に対して怒りに近いものを感じていた。

実際のところは国際エネルギー機構を通じた先進国間の原油融通の話し合いも順調に進んでいるとはいい難い状況にあった。どうみても日本の危機は刻一刻と追っている。だが、とりあえずは文字通りの言葉を信じ、多くの日本人の態度は享楽的ですらある。そのことが恐ろしく不思議なことね、とジェーナはいった。小川はその通りだと思う。

そこまで、駅からは十分足らずの距離であった。駅前の雑踏を抜け出ると、突然閑静な住宅街が現れる。年輪を重ねた街路樹が、落ち着いた街の景観をつくり

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

出している。睦まじく寄り添い、落葉を踏み締めるようにして歩く二人の影は、この街の風景に淡くとけ込んでいくようにみえる。

ブザーを押した。インターホンから女性の声が返ってきた。まもなく門のドアがあいた。歳のころ、五十前後であろうか。たぶん、家政婦かお手伝いさんといった風情の女性だった。二人の来訪はすでにわかっていたらしく、そのまま玄関先へと案内した。車寄せを抜けると庭がある。

そう広い庭とはいえないが、よく手入れがゆきとどいた庭である。

開き戸式の古風なつくりの玄関だった。鈴の音をたて、開き戸があいた。玄関のタタキに鎌谷が満面笑みをたたえて立っていた。戦前のつくりなのか、歩くと廊下がきしみ音をたてた。鎌谷は先に立ち、二人を応接間兼用の書斎に案内した。部屋中いっぱいにところ狭しと雑誌やら本が無造作に積みあげてある。

唯一の趣味が読書であると、鎌谷がいっていたのを小川は思い出した。二十畳近くある広い部屋だったが、雑然としているためか、狭く感じる。これまた年代物らしい安楽椅子に鎌谷はかけ声をかけるようにして座った。その反動で椅子が大きく揺れた。お気に入りの椅子のようだ。

「よくきてくれた」

鎌谷はひと呼吸おいてそういった。小川は恐縮気味に礼をいった。そばに座るジェーナはもの珍しげに、雑然とした部屋のなかを見渡していた。やはり純日本風のつくりのしかも質素な鎌谷の屋敷に多少驚きを見せているようだった。部屋からは南に面した庭を見渡すことができた。庭というよりは野菜畑のようである。世間の人たちがいうように、一等地を畑にするとは、なるほど贅沢だと小川は思った。季節が季節だけに、作物は見あたらなかった。

「ばあさん、来てくれ」

鎌谷は子供のように大声で叫んだ。邪気がない。やがて姿を現したのは六十代半ばの品の良い老婦人だった。その人が妻昌代だった。先妻を亡くし、昌代は後添えだと聞いたことがある。花街の出の入らしく、美形でこの歳にしては華やか

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

さがある。粋に着こなした和服がよく似合った。

「いらっしゃい」

弾んだ声で昌代は二人に声をかけた。ジェーナが日本語で挨拶をかえした。彼女のいいまわしが余程おかしかったのか、昌代は声を上げて笑った。遠慮のない人である。鎌谷は渋い顔で昌代の非礼を叱った。が、本気ではない。ジェーナも引き込まれて笑った。

昌代は生活の知恵ということでは、まるで白痴に近いのではないか、小川にはそう思われた。お茶の葉も満足には入れられないようである。鎌谷がごく自然な態度で手を貸した。じゃれ合いの感じもないではないが、おかしな夫婦である。

そういえばどこかジェーナに似たところがないではない。小川はジェーナと出会った最初のころを思い出した。ジェーナはメキシコの名門の出である。生活に関しては驚くほどの無知だった。そういう育ち方をしていなかったのであろう。家事というものをまるで知らなかった。洗濯から食事の支度まで、それが小川の分担になっていた。それも今から思えば楽しい思い出である。

二人の女たちは気が合うようである。もどかしく感じたのか、驚いたことに昌代は途中から英語を話した。しっかりした古風な喋り方だった。それほど流暢(りゅうちょう)とはいえないが、ジェーナとのやりとりには充分である。

家事に対するその不器用さのわりには、話の内容から判断すると、ひとかどの教養を持ち合わせている女性のようである。昌代は油絵を嗜(たしな)んでいるようだった。粋で和服が似合う昌代からはとても想像できないことである。現代絵画だけでなく絵画の歴史についても造詣(ぞうけい)が深かった。

そしてメキシコの絵画が、いかに素晴らしいものであるかを強調したりした。ことに直線と原色を生かした色彩が素晴らしい、それがメキシコ絵画の特徴だともいった。日本の芸術家の幾人かが若い時分、メキシコで修業したことなども話題になった。そういえば岡本太郎が描いた壁画がメキシコで高い評価を受けていることを、小川は思い出した。

ジェーナも写楽などという素晴らしい芸術家を生んだ国なのに、現代日本にはなぜ、その伝統が残されていないのか、疑問をさし挟んだりもした。現代絵画で、国際的評価を受けているような人物を思い起すことはできない。二人のやりとりはいっぱしの美術評論家のようでもある。すっかり男たちは聞き役にまわってい

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

た。

「私の作品を見ていただけないかしら」

「是非、拝見させて下さい」

まるで男たちのことは眼中にないらしい。そういって、二人は書斎兼応接室を出ていった。冬の薄日が庭先を淡く照らし出している。落葉樹の葉がすっかり散り落ち、わずかに数枚の色づいた葉っぱを残しているのみだった。侘(わび)しく物悲しい風景である。

「ところで……」

と、鎌谷が改まった調子でいった。鎌谷がいわんとすることは小川にはわかっていた。二回目の交渉も不調に終わっていた。局面は膠着状態にあった。なんとか、事態を打開できないものか、それが鎌谷がいわんとすることであろう。デリゲーションが日本に滞在するのはあとわずかである。

「現在、メキシコの原油生産高はどの程度の水準だろう」

「だいぶ回復しました。現在のところ日産百二十万バレル程度でしょうか」

「まだ、輸出余力は完全に回復はしていないということだね」

「その通りです」

「そうすると、対日供給はせいぜい日産三十万バレルが限度か」

あるいはそれとても無理な数量だとは思ったが、小川は黙って頷いた。

「やはり借款と原油供給の問題は切り離すことはできない」

なにかいい知恵はないものか、といって鎌谷は唸(うな)った。そこで二人の会話はしばらく途切れた。実をいうとレピカも焦っていた。プロジェクトの資金調達もさることながらレピカの念頭にあるのは、ポスト・アンジェトロ政権を控えて、政治資金をいかに確保するかにあった。たぶん日本にきたミッションのひとつはそのことにあるはずだと小川は思った。

だから笠原の危なげな話に魅力を感じたのではなかったのか。レピカの隠しミッションに日本が協力をすること、それが確実な打開の道であることは、小川にはわかっていた。多少のためらいはあるが、そのことを鎌谷にやはり話すことにした。

「なるほど……それは僕も考えてはいた」

そこは老練な経済人である。意外にも鎌谷はあっさりと諾(うなず)いた。いろいろな方

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

法が考えられるが、そうした資金をつくる場合、やはり商品借款が適当ではなかろうか、と鎌谷はいった。

「商品借款……」

「その通りだ」

商品借款に対しては疑惑の目で見られがちである。プロジェクト借款はプラントであったり、港湾施設や道路であったりするので、借款の貸し手の側は借款の使途を現実にこの目で確かめることができる。ところが商品借款の場合は必ずしもそうではない。

商品借款は発展途上国を対象として、その国が民生安定上、緊急に輸入する必要がある物資の調達のため、緊急融資するのが本来の目的である。ところが借款は食糧や肥料、工業原材料などの形で供与されるので、借款を受けとる側は自国内でこれをいくらでも現金化できる。だから商品借款を受けとる国の政権には格好の資金捻出の手段になりうるわけだ。商品借款を巡って時折、疑惑が囁かれるのはこのためであった。

「たぶん事務方が反対するだろうね」

問題はメキシコが発展途上国のなかでも「最貧国」というカテゴリーにあてはまるかどうかだ。外務省や大蔵省はたぶん異論を唱えるだろう。商品借款はいわれるところの「最貧国」を対象として貸しつけられる。だからメキシコの場合は微妙だった。だが、まったく事例がないわけではなかった。韓国や中国の事例がある。鎌谷は頭をひねりながらいった。

「それは政治が解決するほかないだろう」

鎌谷は自信に満ちたいい方をした。

「どの程度の規模を考えておいてよろしいでしょうか」

「せいぜいのところ一億ドル程度だろうね。ただし、これは問題の性格からしても日本側からいい出すわけにはいかないので、メキシコ側が対日要求として次の交渉の場で出してほしい」

「そうですか……ただ、もうひとつ問題があります」

小川がいった。プロジェクト借款に限ってみると、日本側が提示している条件では、金融コストがいかにも高い。金融コストをもう少し引き下げることができないか、といった。

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

「あれが限度だろうね。むしろ市中シンジケーションとの交渉いかんにそれはかかっているのではないかと、僕は思う。日本輸出入銀行の裸金利は年利六パーセント、これに市中金利が加わるので、出来上りが一見高くなるようにみえるが、日本の財政負担からいえば限界だ。あとは一億ドル程度の商品借款をつけられるかどうか、あまりフレキシブルなところは残されていない、そのあたりをメキシコ側は考える必要がある」

商品借款の供与。それが日本側が考える最後の切札のようだった。そうだとすれば、メキシコとしてもなんらかの譲歩を考えねば、たぶんこの話は流産することを覚悟せねばなるまい。しかし、政治資金の捻出に日本側が協力するというのだからレピカの態度も軟化するのではないか、

小川はそう確信が持てた。なんとか、打開の道が開けそうな気がした。

「ただし、小川君。繰り返しになるが、前提はメキシコ原油が日本に供給できるかどうか、それが決まらなければ日本側としても、商品借款を認めるわけにはいかないのだ。エネルギーが不足して、それが原因で不測の事態が起こるとは考え難いにしても、民心を安定させるためにもここでメキシコ側の公的な約来がほしい。できるかできないかではなくて、必要なことは公的な約束を取りつけることが、今は肝要なことなんだ」

そうすると、今回の協定書にはそのことを明確にうたい上げる必要がある。天然ガスプロジェクトで生産される製品、たとえばメタノールガソリンなどは日本側の要求に応じ、簡単に供給は約束できるであろう。ただ、原油の場合、日本が要求している量は最低でも日量三十万バレルだ。仮にメキシコ原油の生産が百五十万バレルまで回復したとしても、全生産量に対して五分の一に当たる量だ。レピカが考えていたのはせいぜい十万バレルである。

小川は考え込んだ。そしてレピカとカルロスの顔を交互に思い浮かべた。彼らは、鎌谷がいった要求を呑むだろうか。少し難しそうに思えた。

「原油自体、供給は約束できるとは思いますが、数量は自信がありません」

「日本は今すぐに三十万バレルの原油を必要としているのではない。必要となるのは一年後だ。それに重要なことは、とりあえず協定書のなかでメキシコが原油を供給する、と約束することだ。その協定文を見れば国民は納得もし安心もする。極端にいえば、それだけでも充分だ」

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

無用な混乱を収拾するにはそれが一番効果的だとも鎌谷はいった。小川はそういわれて考えた。いくらなんでもメキシコが現に必要としている原油を削ってまで日本に飢餓輸出する義理はない。しかし、一年後、あるいは一年半後には、原油生産も往時の水準にまで回復させることは可能だろう。そうだとすれば、無理な話ではないようにも思われる。

「わかりました、その線で話をしてみたいと思います」

「そうしてくれると、有難い」

鎌谷は短くいった。そうして大きく頷いた。すでにとっぷりと日は暮れていた。時折、寒風が庭先を駆け抜けていく。風が窓ガラスを叩いていた。

翌日の午前十時から対日交渉の最終方針を決める代表団会議が開かれた。随員を含め全員が出席した。昨日、小川が鎌谷と話した内容は、レピカを通じて本国のカルロスのもとに報告された。カルロスは数量に対するコミットは別にしてもやはり日本側の要望を呑まない限り交渉は纏まらないだろう、との判断を示した。細目はデリゲーションの判断にまかすともいっていたという。

冒頭、そう会議で報告したレピカの言葉を聞いて小川は安堵した。これで交渉の山場は越えた、小川はそう思った。あと残るはセレモニーだけである。出席者全員を見渡すようにしてレピカはいった。

「日本側は新たに商品借款を提供してもよいとのことだ。ここらあたりで、そろそろ我われとしても譲歩の線を考えておかなければならないだろう。問題は原油の提供だが、最大でも二十万バレル、それが限度であると思う」

日本側が期待している数量よりは少ない。だが、考えてみれば、メキシコとても有り余るほど、原油が生産されているわけではない。米国のメジャーがメキシコから撤退したあとは、急激に生産が減退したからだ。原油の生産はボウリングを繰り返しながら、次つぎと新しい油層を開発していかなければならない。だが、メヒペトロにはその技術力がなかった。

そのため既存の油田が、次つぎと枯渇していった。それに資材の供給も外貨不足が深刻となっていたため、思うような手当もできないでいた。またたく間に生産量は後退、ピーク時の二百七十万バレルが、一挙に百万バレルになった。

だから二十万八レルが限度だと、レピカがいったことは駆け引きではなかった。不満が残ろうが、それは日本側にも理解ができるはずである。そこらあたりが妥

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

当ということではないか。しかし、問題はまだある。今後、市中シンジケーションとの間で金利を確定する交渉を進めなければならない。それも難問である。金融担当のアキラルがそのことに触れた。

「しかし、大粋が決着をみた以上、そう心配することはないと思う。日本輸出大銀行との合成金利で年率七パーセントを確保できればまずまずというところではないか、どうだろう。むしろ佐藤忠商事の笠原副社長がいっていた国際市場からの借款の取り大れを真剣に検討してみたいと思う」

やはりレビカはあのことが忘れられないでいるようだった。しかし、アキラルはそうした資金の取り入れには必ずしも賛成しかねる、という表情をつくったが、敢えてそれ以上はいわなかった。ともかく三週間におよぶ交渉が、ようやく決着をみそうだ、デェリゲーションに参加しているだれもがそのことに安堵していた。

「よし、それではこの方針で日本側との最終交渉に当たることに決する」

レピカはそういって会議を締めくくった。自然に拍手が沸いた。レピカは小川の手を握った。多少、興奮しているようである。レピカはその知的な顔立ちとは裏腹に興奮しやすいタイプの男のようである。

第四回目の交渉は順調に進んだ。結局、日本側は総額五十億ドルを、海外経済協力基金十八億ドルを五年間に渡って供与すること、日本輸出入銀行と日本の市中銀行は協調融資の形でプラント等の生産設備の建設費用として二十五億ドル、石油開発公社はパイプライン建設費用として五億ドルを、これとは別途にメキシコの経済事情に照らし、二億ドルの商品借款を、それぞれ金融機関の個別交渉を踏まえて供与することを約束した。提案の最後に石井が勢いよくいった。

「日本側が提示する条件は以上であります」

今度はレピカがメキシコ側の条件を再確認する意味で、改めて説明に当たった。

メキシコ側は日本のエネルギー事情を勘案して、五年間にわたり日量二十万バレル相当の原油を日本向けに輸出することを約束した。原油価格はその時どきの国際実勢価格を参考にしながら決定するとの付帯的な条件がつけられていた。レピカは終始、満足げな笑みを浮かべていた。

協定文は作業部会を設置して、案文を検討することになった。メキシコ側からはアキラルが主席代表として交渉にあたることになった。日本側の主席は日経連の飯田経済協力部長だった。小川はオブザーバーとして協定文作成委員会に出席

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

することになった。

「これでけっこうでしょう」

作成された案文をみながら石井が頷いた。レピカも問題はない、と明確にいい切った。あとはだれがこの協定文に署名するかだ。メキシコ側は、鎌谷自身の署名を希望した。しかし、相互主義の原則でいこうということで、署名問題は決着、メキシコ側はレピカが、日本側は日墨経済委員会を代表して石井千代田銀行頭取が署名することになった。鎌谷会長とメキシコ大使が後見人の立場で、この署名に立ち会うことになった。

協定案文が合意された、その日の午後三時きっかり日経連会館の特別会議室で署名が行なわれた。署名後、双方は記者会見に応ずることになった。日墨交渉は極秘のうちに進められていたので、日経連詰め各紙記者たちもその日の発表までほとんど気がついていない様子だった。

ただ、一紙のみが「日墨協定成立、日本に長期原油供給」と、その日の夕刊の一面トップに見出しを掲げスクープした。朝毎新聞だった。岡崎が演じたスクープである。朝毎を除いてはこのニュースは、午後三時発表という時間からみて、翌日の朝刊になるだろう。

たぶん、岡崎は得意満面でこの記事を書いたに違いない。小川は岡崎の顔を思い浮かべ、思わず苦笑した。朝毎新聞はその解説記事のなかで、今度の協定がいかに重要な意義を持つかを、熱っぽく強調していた。

夕方、七時のテレビのトップニュースは、やはり日墨協定に関するものだった。テレビのスポットライトを浴び、記者たちの質問を受けるレピカの姿が映し出され、レピカはいかにも得意げに記者たちの質問に答えていた。小川はニュースを見ながら、これで終わった、と実感した。

（つづく）

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

小説国際プラント・ビジネス戦争（十八）

杉田望

アメリカの逆襲

傍らでは静かな寝息を立てジェーナが眠っていた・突然、電話が鳴った。小川はぎくりとして、起き上がった。まだ、朝の六時ちょっと前だった。電話の向こうから岡崎の声が聞こえてきた。

「なんだって……」

「そうなんだ。アメリカが日墨（にちぼく）協定に反対しているというんだ」

ホワイト・ハウスの報道官が、定例の記者団に対するブリーフィングで日墨協定に米国は反対であるとの意向を表明したというのだ。小川は横面（よこつら）を思い切りひっぱたかれたような気分になった。問題はその理由である。が、これまでの米墨関係を考えれば有り得ない話ではない。

アメリカの日墨協定に対する異議申し立てが、単なるブラッフなのか、それとも本気になってこの協定を潰しにかかっているのか。岡崎の話からだけでは判断できない。小川の頭はまだ、充分に眠りから醒めてはいなかった。ジェーナが不審げに小川の顔を覗き込んだ。心配そうな顔だった。

「考えられることは、アメリカの同盟国、日本がアメリカの敵性国家であるメキシコに借款を提供する、これは黙っていられないということではなかろうか。それにデフォルトに対する報復措置はまだ解除されているわけではないからね。だから日本の行動は先進国側の足並みを乱すことになる……それで、ということじゃないのか」

岡崎はその理由らしきことを一気にいった。たぶん、岡崎のいう通りだと小川は思った。問題は日本政府が米国の異議申し立てに、どのように対応するかだ。

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

内政干渉だといって、勇ましく突っぱねるのか、それともアメリカのいいなりに協定を破棄するのか。

「通産省の幹部たちも酷(ひど)い困惑ぶりで、まだ、対応は決めていないようだ」

「そうか、ありがとう」

といって、電話をきった。小川はしばらくの間呆然と立ちつくした。ジェーナが後ろからそっと、ガウンを肩にかけた。考えが纏(まとま)らない。沈黙を守ってくれたのがありがたかった。やはりこの協定は破棄される運命にあるのだろうか。小川は焦りを覚えた。東の空か明るんできた。高層ビルが霧のなかに霞んで見える。

小川は素早く受話器を握った。こんなに朝早く失礼だとは思ったが、場合が場合である。鎌谷はおきていた。鎌谷はそのことをすでに知っていた。難しいことになりそうだ、とはいったが、さして心配しているふうではなかった。小川は鎌谷の声を聞いてなぜか安堵を覚えた。

「来春、メキシコ大統領の選挙が行なわれる予定だから、だれが選ばれるにしてもアメリカはそれまで対メキシコ政策を変えるつもりはない、僕はそう思うね。だから今、ここでことを荒立て、アメリカと争ってもほとんど意味がない。協定はグレーゾーンにおいておくのが賢明というか、最善の策だと思う」

鎌谷は意外にも落ち着いたいい方をした。時間稼ぎをして、状況の変化を辛抱強く待つ。なるほど、それが大人の知恵というものであろう。小川もそうかもしれないと思った。それでもやはり、日本がこの問題にどのように対応するのか、それが気になった。

「まだ、米国がどんなことをいっているのか、情報を正確に把握しているわけではないし、米国が単に不快感を表明しただけなのか、それとも外交ルートを通じて正式に協定破棄を追ってくるのか、そこんところがはっきりしていない。日本の対応は米国の意向を正確に把握してから決めても遅くはないと思っているんだがね」

鎌谷はそれ以上のことは言葉を濁していわなかった。そこで鎌谷は、また、連絡をとり合って最善の策をともに考えようではないか、といって電話を切った。振り返ると、ジェーナがにっこりと微笑みかけた。小川はいくぶん落ち着きをとり戻したように思えた。

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

いやに寒い朝だった。七時のニュースはその年初めてシベリヤから寒気団が日本列島を襲ったことを伝えていた。西尾は身震いをしながら旧館の玄関につながる階段を駆け上った。

官僚たちの朝は遅い。夜遅くまで居残り、仕事をやっているせいもあるが、それは習慣のようなものである。いつもだと全員席に揃うのは早くともせいぜいのところ午前十時前後だった。

が、この日に限って早かった。部屋は緊張感に包まれている。まだ、八時少し前だというのに『緊急エネルギー対策軍部』では関係部局の幹部が顔を揃え、これから会議が始まろうとしているところだった。長田次官の顔もあった。会議を司会するのは佐藤資源エネルギー庁長官である。今日は、通商政策局から高橋経済協力部長も参加していた。まだ、充分に暖房が効いていない。部屋は寒ざむとして吐く息が白かった。

今日の会議で最大の焦点となるのは、メキシコ問題であると西尾は思った。咳払(せきばら)いをして、佐藤長官が開会を宣した。私語がぴたりと途絶えた。まず、最初に報告に立ったのが近藤官房審議官だった。近藤の表情がいくぶん歪んで見えた。それは極度の緊張を余儀なくされているときの癖でもある。たぶん、徹夜でもしたのではないか。目が充血していた。

「事件発生以後、産油各国に対して原油の安定供給をお願いすべく、政府代表団を派遣いたしましたことはご承知の通りであります。これまで中国、カナダ、アメリカ、インドネシア、マレーシアなど各国を歴訪したわけでありますが、これまで増量を確約してくれましたのは中国のみであります」

そこで一旦言葉を切って、近藤は各国との交渉の経過に触れた。中国が年間十万八レル程度の増量に応じたほか、カナダ、マレーシアが比較的柔軟姿勢をみせた以外、各国の反応は冷淡だった。わざわざ通産大臣が出向いても、新たに確保できる原油の量は、楽観的に見て三十万バレル程度であろう。そのことは新聞報道などでも知られていた。

だからだろう。特別質問も出なかった。続いて指名されたのが、西尾石油計画課長だった。事件発生以後、中東情勢がどのような変化を見せているのか、それが西尾に求められた報告の内容だった。昨夜、カール・ルビンスから得た情報に基づき、総括班長の守谷が徹夜で纏めたペーパーが出席者全員の前に配られてい

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

る。ペーパーには『極秘』と生々しい朱印が押してあった。

「サウジとイランは一触即発の状態にあるという意味で、中東情勢に基本的な変化は起こっていません。とりあえず米海軍が湾岸地域を軍事管制下においているので、かろうじて均衡が保たれているのが実状です」

カールの話だと、ソ連もアメリカに対抗してイラン国境周辺に機甲化部隊を中心とした五十万余の陸軍兵力の集結を終えていた。根拠はあいまいだったが、紛争は拡大すまい、とカールは断定的にいっていた。たぶん、米ソ両国はホットラインを通じて、常時連絡を取り合っているのではないか、とそのとき思った。

「問題は原油生産の回復の見通しでありますが、核攻撃による被害はワール油田を中心に周囲三十キロに及んでおりまして、同地域で正常に人間が活動できるようになるには最低、三年は必要かと思われます」

放射能汚染は酷い状態にある、とカールはいっていた。ペルシャ湾一帯は陸上はもちろん、海空とも米海軍の手で完全に封鎖されていた。だから湾岸での船舶の航行は不可能になっていた。

ただ、幸いなことに、八四年に完成をみたバラスから地中海に抜けるパイプラインは無傷だった。パイプラインによる原油輸送は当面問題はなさそうだった。

したがって、イランとクウェート両国の原油、それにサウジの西北部で生産される原油の一部は完全に確保できる状態にあった。そうすると、中東原油は往時の約六十パーセント程度は確保できるはずだ。イラクとクウェート両国は事件後、世界に向かって、増産を約束していた。また、サウジも無傷で残った油田を中心に速やかに増産体制をつくりつつある、と発表していた。

西尾はカールを通じて得た情報を主観を混じえず、正確に報告した。日本が確保できる原油、さしあたって中東原油についていえば、せいぜいのところ百万八レルがいいところだろう。

あとは石炭や代替燃料を積極的に活用、それに省エネルギーを推進することで五十万バレル程度は節約できる。それにしても最低、日本が必要とする原油の量は三百五十万バレル。そうだとすれば、明らかに六十万八レルは不足する計算だ。西尾は具体的にデータを上げながら説明にあたった。もう省エネルギーも限界ではないかとも西尾はいった。

「したがいまして、メキシコ原油が協定に基づき安定確保ができるかどうか、き

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

わめて大きな意義を持つものだと思います。ですからメキシコ原油の確保に政府として全力を挙げるべきだと思います」

西尾は現状報告が一段落した段階で、付帯意見をつけ加えて言葉を結んだ。しばらく沈黙が続いた。やおら発言を求めたのは長田次官だった。頭髪がすっかり白くなっている。サウジ事件が起こってから一層白くなったのではないか。そのようにみえた。

「今、計圃課長がいった日墨協定に関してだが、周知のようにアメリカがこの協定に注文をつけてきている。これにどのように対応するか、通産省として見解を纒める必要があるように思うんだが」

「次官がいわれる通りだと思います。それではまず、アメリカがどのようなことをいっているのか、そこらあたりのことを通商政策局の米州大洋州課の方から報告を頂けないだろうか」

立ち上がったのは米州大洋州課の尾崎課長だった。尾崎は昭和四十年人省。温厚な人柄として、関係者の人望の厚い人物だった。歳に似合わず、どんな場面でも沈着冷静である。

「グレーク報遺言が定例の記者会見で話した内容、共同通信が配信したニュースによりますと、正確にはこういうことです。つまりグレーク報遺言は記者団から昨日調印された日墨協定に関する感想を聞かれたのに対して、個人的な見解を示したものです。その意味は、いわゆる政府声明といった性格のものではないようです。しかし、その後、在米日本大使館に対して、同日午前十時、国務省の日本課長が文書でもって日墨協定の内容に関して、問い合わせをしてきたという経過がございます」

尾崎課長はすきのないいい方で話した。さらに言葉をつないだ。「しかしながらアメリカ政府が本協定の締結に不快感を持っていることは事実でありまして、同日午後三時、今度は公式に日墨協定は日米関係を損なう重大な内容を含んでいるものと判断されるので、日本政府は日米関係を配慮、協定の取り扱いに慎重を期すよう希望する、という主旨の公式文書を山中大使に手渡しています。ここにありますのがそのコピーです」

手にしたコピーを示しながら尾崎はそういった。二国間の問題に第三国が口を挟むことさえ、異例のことである。米国政府が示した文書は明らかに内政干渉と

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

も受けとれる内容だった。米墨関係を考えれば、アメリカ政府の立場もわからないことではないが、それにしても露骨にすぎはしまいか。エネルギー対策会議は重い空気に包まれた。

「アメリカの要求をはねのけ、警告を無視したらどういうことになるんだろう」

そう聞いたのは近藤官房審議官だった。尾崎は生真面目な調子で答えた。

「この文書を読んで見た限りでは、日本が米側要望を拒絶した場合、報復措置をとるようなことは書いていない。とりあえず日墨協定に対する米国政府の立場を国際的に表明しただけ、と受けとれなくもありません」

「そうだとすればこれは単にアメリカの面子（めんつ）だけの問題ということになる。つまりアメリカはこの協定を本気になって潰すことを考えているわけではない、そのように判断できるのではないか」

そういったのは吉田官房長だった。吉田がいうように単なる面子だけの問題であるならば、適当にあしらうだけでよい。場合によっては断固として拒絶することも考えられる訳だ。尾崎課長は額にしわをつくり考え込んでいた。

「しかしそうはいいましても……これは明確に協定破棄を迫ってきたものと理解しなければならないだろうと思います。ですから軽々に結論を急ぐことは危険かと考えられます」

日米関係を考えれば日本としてはアメリカの要求を無下には断われない事情がある。日米関係を規定する安全保障という問題を大上段に構えて議論することは別にしても、現実問題としてアメリカとの間ではサウジ事件発生後、緊急原油融通の一環であるアラスカ原油の対日供給問題が日米間の外交課題に浮上してきていた。そのこともアメリカに回答するに当っては、充分に考えておく必要がある。尾崎はそのことをいいたかったようである。

実際のところ日本にとってアラスカ原油は魅力である。交渉の経過をみる限りでは、米国の態度は冷淡ではあったが、それでも日本政府はアメリカ人の善意を信じていた。しかし、二十万バレルのメキシコ原油もこれまた魅力だった。どのように対応するか、難しい局面である。

「考えてみますと、日墨協定は簡単にいってこれは純粋な民間協定であって、政府が直接関与して成立させたものではありませんね。政府間で取り交わした協定でしたらアメリカ政府のいう通り考慮の余地はあります。が、この協定は日本側

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

は日経連、メキシコ側はパテック社という民間企業が結んだ協定です。民間が締結した協定に政府としては介入することはできないし、すべきでもない。そういう理屈は成り立たないものか、どんなものでしょうか」

そういったのは経済協力部長の高橋だった。高橋はどこかひょうきんなところがある。どんな場合でも深刻さがない。頭の体操としては面白い発想である。しかし外交の場でそういう理屈が通用するかどうかは別である。が、会議の雰囲気が高橋の発言で和んだことは事実だった。

「うん、その発想……使えるのではないか」

突然、長田次官が叫ぶようにいった。

「次官、それはちょっと……」

佐藤長官は例の古武士のようなもったいぶった物腰で、顔をしかめるようにしていった。本気でとがめているわけではない。どこかユーモラスなやりとりだった。エネルギー対策会議の部屋には、どっと笑い声が起こった。

「いや、本気なんだよ。だいたいが、アメリカさんは惚(ほう)けたことをいっているわけで、惚けに対してはお惚けで答える、これも一案だと思うがね。その意味で高橋部長がいったことは確かにひとつの見識である」

わりあい真面目な顔で長田次官はいった。考えてみればそうかもしれない。議論の噛み合わせをわざとずらせることで、正面からの対決を避ける。だが、どう考えてもむちゃくちゃな理屈である。

「まあ、次官がおっしゃるようなことは無理だとしても、アメリカ政府が本協定を本気になって潰すことを考えていないと判断されるのだったら、日本政府として目くじらを立てて、米政府の警告に反論したり、あれこれ公的な場で発言することは決して賢明な策であるとは思えない」

やや間をおいてそういったのは佐藤長官だった。

「ということはアメリカの警告を無視するということになる」

暖房が効いてきたためか、部屋は蒸し暑くなってきた。それに議論の内容がホットであるためか、吉田官房長の額には汗がにじみ出ていた。官房長は上着を脱いで話を続けた。

「この場合、日本の国益は何か、原則的に問題を考えますと、やはり原油の供給確保を安定させることにあるだろうと思う。この半年の間で日本は約六十万バレ

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

ルの原油が不足することは、はっきりしているわけです。その場合、メキシコ原油の比重は三十パーセントを占める。私は日本の国益はメキシコ原油を確保することにあるだろうと思う」

どうやら結論を出さねばならない段階にきたようだ。原則論としては吉田官房長のいう通りだが、それをどういう形でアメリカに伝えるか。この段階ではアラスカ原油の対日供給交渉も決着をみているわけではないが、冷静に考えるならば、日本が期待していたアラスカ原油の対日供給も困難な見通しである。

それに緊急原油融通の先進国間の話し合いで、米国の態度は協力的なものではなかった。吉田官房長のいい方には、いずれにせよアメリカは日本の面倒をみることは最初から考えていないのではないか、そうしたアメリカに対する不満が言外に込められた発言に聞こえた。

そんな空気を反映したのか、エネルギー対策会議の方向は「米国の要求拒絶すべし」という強硬論に傾きつつあるようだった。この十年来、通商摩擦でアメリカからいたぶられ続けてきた通産官僚としては、潜在的に反米感情がある。そのことも強硬論に拍車をかけているようにみえた。

それまで終始沈黙を守っていた生田通商政策局長が発言を求めた。日本の生存はアメリカを抜きにしては考えられない。感情的になって、今、アメリカの要望を拒絶すれば将来の日米関係に禍根を残すことになるのではないか、という主旨の発言を長々とした。

再び議論は振り出しに戻ったようである。確かにそこが日本にとってのジレンマであることはわかっている。だが、サウジ事件が発生して明確になったことは、安金憬障を含めて、頼りとしていたアメリカはこの日本の危機に際して、あまりにも冷淡であったという事実である。そのことが会議出席者全員の胸のなかに重くのしかかっていた。

今度は高橋経済協力部長が再び発言を求めた。

「日本が考えているほどには、アメリカは日本のことを真剣に考えているわけではなさそうです。国際エネルギー機構でのアメリカの態度は、日本が必要とする原油は日本自身の自助努力で確保すべきである、ということでしたね。そういうことで日本は自らの努力でメキシコ原油を輸入することにしたわけです。これが第一。第二はアメリカが対メキシコ関係で問題としていることは、メキシコが実

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

施にふみ切ったデフォルトに対する対抗措置との関連、つまり報復措置が解除されていないにもかかわらず資金協力を行うことが問題になっているのではないか」

「それで……？」

と佐藤長官が先を促した。

「いわば日本の資金協力は原油代金決済のひとつの方法として、メキシコに提供するものであり、対メキシコ報復措置で確認された新規借款の提供にはあたらないという解釈も可能かと思います」

生田局長は渋い顔をつくって、高橋の話を関いていた。それは生田の意見に対する正面からの反論でもあった。高橋の発言をきっかけに二人の間で激しい議論が交わされた。生田通商政策局長は高橋にとって直接の上司である。だが、高橋は譲らなかった。全員が二人の議論に聞き入っていた。議論は平行線だった。が、二人の議論はこの事態にどのように対応するのか、その対応を巡る問題がすべて集約されているように思えた。

そろそろ正午に近い時間になっていた。結論を急がなければならない。議論はまだ長引きそうな気配だった。議論の横あいから今度は尾崎米州大洋州課長が再び発言を求めた。

「問題はふたつあるように思います。ひとつはメキシコに対する資金協力が始まる時期です。もうひとつはメキシコ原油の第一船が入る時期です。つまり協定が発効するという意味は、このふたつの要件が満たされたときであって、逆にいいますとその段階でアメリカからの要望に答えたとしても、けっして遅いとはいえないのではないか」

尾崎課長のいいたいことは、協定が発効するまでの間の時差を利用しようではないかということである。なるほど、その間にメキシコに対するアメリカの対応も変わる可能性がある。確かに尾崎のいう通り、実際に海外協力基金の資金が供与されるまでにはかなりの時間が必要だ。

まず、実際に資金を提供するまでにはいくつかの手順を踏まなければならない。そうでないと、日本の経済協力のスキームは動かない仕組みとなっていた。まず、国際協力事業団によるプロジェクトの確認と経済性の調査が必要だ。その上でメキシコ政府は外交ルートを通じて日本政府に資金協力を要請、これを受けて日本

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

政府がブリッヂを表明、ここで交換公文が締結され、初めて資金協力が可能となる。この手順を踏むとすれば一年はかかる。問題の性格上、急ぐ必要があるとしても、それでも最低半年はみなければなるまい。

「まず、原油備蓄があるので、向こう八ヵ月は問題がない。さらに先はどの計画課長の報告だと、湾岸諸国が原油生産を再開できるのは一年半後の見通しということだった。そうすると、エネルギー供給がもっとも深刻となるのが来年の夏以降、たぶん来年秋がピークとなることが予想される。一方、現実にメキシコ原油の輸入が始まるのは八八年の六月以降ということでしたね」

「ということは……？」

そう聞き返したのは、佐藤長官だった。尾崎は佐藤長官の方に向かって、大きく頷きながら言葉を続けた。

「だとすればですね。アメリカ政府に対してはとりあえず、要望に添うように問題を検討してみたい、とだけ回答しておき、実際にアメリカに回答をあたえるのは日墨協定が発効する直前でもかまわないのではないか。そういうことではいかがなものでしょう」

日墨協定が発効するまで約半年間、要するにそれまで結論を出さないという意味である。その意味では充分に時間はある。ここで慌てて、結論を出すことは馬鹿げたことである。尾崎課長の発言を契機に過熱した議論はいくらか鎮静したかにみえた。長田次官は白髪をかき上げながらしきりに考え込んでいた。

「米国政府の要望を検討する……つまり時間稼ぎをするということだね」

「ありていにいえばそういうことになります。が、この場合、半年という時間は大きな意味を持つのではないでしょうか。第二メキシコの大統領選挙が終わった頃には、アメリカの対メキシコ政策が転換される可能性がある。つまり今の対メキシコ強硬政策はアンジェトロ政権に向けられたものであって、政権交代が行なわれれば、アメリカ政府が政策転換を行なうことは充分考えられる」

「よし、決まった。それでいこう」

そう叫ぶようにいったのは佐藤資源エネルギー庁長官だった。午前八時からの長く白熱した議論はようやく終わった。午後からは外務省を含めた関係省庁連絡会議が行われることになっていた。

たぶん、関係省庁連絡会議では外務省が日米関係の重要性を考慮すれば、日墨

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

協定破棄もやむなしとの主張をすることは充分予想されることである。しかし、ここでは本音の議論をすることは危険である。危険であるばかりではなく、それに正面から反論を加えることは、せっかく確保が可能となったメキシコ原油すらも失ってしまう恐れがある。

とりあえず、アメリカ政府のいい分を検対してみようじゃないか。が、実際には協定にもとづき調査団を派遣するなど、メキシコ原油を積んだ第一船を迎えるべく準備を進める。それが通産省の基本方針として決まった。高波が荒れ狂う嵐の海の底で、魚たちが嵐の過ぎるのをじいっと待っている姿に似ている。

「というよりは、あひるの水掻きということですな」

高橋経済協力部長が例のひょうきんな顔でそういうとみんながどっと笑った。確かに日本の立場はあひるの水掻(か)きのようでなければならない。アメリカとことを構えるのはいかに無意味であるかを、官僚たちの多くは経験を通して充分過ぎるほどに知っていた。

「協定破棄は考えないことにしよう。ただ、日米関係を配慮、ことを荒立てないための緊急避難的な措置として、要望をきちんと検討することをアメリカに約束したいと思う。アメリカのいい分を検討しよう、ということの、言外にこめられた意味が、この際、重要なのであって、それがどういうことを意味するものかを、経済界も識者も理解できるはずだ」

そういって、長田次官が会議を締めくくった。

その日の午後七時。内閣官房長官談話が発表された。談話の内容は、「日米関係の重要性に鑑(かんが)み、先に米国から要望のあった日墨協定に関連した日米関係にかかる問題について、日本政府としてはこれを真剣かつ慎重に検討したい」

といたって簡単なものであった。読みようによっては協定破棄を検討するようにも受けとれるし、協定尊重の談話とも受けとれる。要するに官房長官談話は曖昧でグレーの部分の多い内容であった。メキシコとアメリカ、関係両国はたぶん自分の都合のよいように、官房長官談話を読みとるに違いない。

（つづく）